
とあるもしもの黄金練成

翔泳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるもしもの黄金練成

【Nコード】

N1712Q

【作者名】

翔泳

【あらすじ】

かつてとある少女を救う為に世界をも敵にまわした青年がいた。青年は少女を救う為に大いなる魔術を会得し、三年後少女と再会する。しかし少女は既に救われた身になり、その少女の隣には自分ではなくとある少年がいた。その事実には青年は嘆き悲しみ、行き場のない感情の矛先はやがてその少年へと向けられる。青年は救う為に会得したハズの大いなる魔術を傷つける為に使ったあげく、少年の神の奇跡をも打ち消す力の前に敗れ、全てを失った。

救いたかった少女、蘇る大いなる魔術、全て失った青年の新たな

物語が始まる。

あの男が主人公！？
たまには原作ブレイクもいいんじゃないかな？

その男の名は……（前書き）

一体全体どうなるのか作者にもはっきり分かりません。一話一話も短くなってしまうかもしれませんが、少しでも楽しんでもらえたらと思っています。

それでは、始まり始まり

その男の名は……

夕日に包まれる繁華街を一人の青年が歩いていった。

ジーンズを穿き、黒のＴシャツには中心のずれた十字架の様な白い模様が入っている少し地味で特に変わった所も何も無い普通の服装。

細くキリツとした眉毛に整った顔立ち。髪は染めたように真っ黒でショートヘア。身長は一八〇センチほどで、線は細く痩せ型と言えるだろう。

「くっ……何も思い出せん」

青年は記憶喪失だった。

ただ、全てを忘れた訳ではない。ここが日本であり、学園都市であり、その中の第七学区である事も分かっている。

がしかし、なぜここにいるのか、自分が誰なのか、過去にどんな事をしていたのか、青年には分からなかった。

思い出せるのは自分自身の名前だけ。

ちょうど下校時刻なのだろうか、辺りには学生の姿が多く見られる。

青年はそんな中に行く当てもなくただ黙々と歩いていた。

とあるもしもの黄金練成

一人の少年がスーパーのレジ袋を片手に、もう片方の手には鞆をぶら下げて駆け足で自宅へを急いでいた。

「ふう、今日はツイてるツイてる。まさかスーパーのセール時間に間に合うなんて、この不幸少年上条さんにしては珍しくラッキーだ」
珍しく運の良かった上条当麻は少し上機嫌だった。

彼、上条当麻にとっては、スーパーのタイムセールに間に合わない事など当たり前だ。携帯電話を落とせばその上を車が走り去る。地面に転がったボールを避けようと思えば風で転がったボールがちよつと足の真下に来る。

とりあえず、不幸なのだ。

だから今回、スーパーのタイムセールに間に合った事は上条当麻にとってこの上ないラッキーな事だった。

「だが安心するなよ上条当麻。どうせこの曲がり角から人が急に現れてぶつかるパターンが落ちに決まってる」

と、その曲がり角に差し掛かった時、目の前を自転車が横切った。「ぬおつ、自転車のパターンか！」

しかしある程度警戒していたお陰で、お腹に大事に抱えていたレジ袋は無事危機を乗り越える事に成功した。

「へへ〜ん。そう何度もお決まりパターンに引っかかるほど、この上条さんは甘くはないぜ、ってぶがつ！」

ドン、と上条当麻は曲がり角を曲がるうとした所で何かにぶつかった。

その衝撃で少し気のゆるんだ手元からレジ袋が離れる。ぐちゃ、と言う音を立ててタイムセールで購入した激安の卵が無残にも地面に叩きつけられた。

「ああちくしょう！ 分かってますよ。結局こう言う落ちになるって事くらい」

半分泣きべそをかく様に上条当麻はぶつかったモノを見上げると、「すまない、大丈夫か？」

一人の青年が手を差し伸べていた。

「すまない、大丈夫か？」

うつかり考え事をしていた所為で、どうやら人とぶつかってしま

ったようだ。

目の前には屍餅を搗いて地面に座る少年が一人。その少年に手を差し伸べるが、

「大丈夫も何も、見てくれ！ せっかくタイムセールで購入した卵が全部パーになっちまったじゃねえかー、ちくしょう」

少年の指差す方には確かにレジ袋から飛び出した卵パックの中で無残にも卵が割れ、中身が飛び出していた。

どうやら悪いことをしてしまったようだ、と青年は考える。

目の前の少年は、どうすんだよこれ、などとぼやきながら改めてパックの中身を確認しようとしていたが、僅かな希望も空しく全てダメだった様だ。

「うむ、私が悪かったようだ。同じものを買う事で許してもらえらるだろうか？」

「え？ 何？ おごつてくれるの？ 無償で？ 後で倍にして返せなんて不幸な落ちがあるとかじゃなくて？」

「無論、そんな事はないが」

「ぬおお、あんたいい奴だ！」

少しテンションの高くなった上条当麻と青年はスーパーへと向かった。

「いやあ、なんか悪いな。余分におかずまで買って貰っちゃって。おまけに荷物まで」

レジ袋を余分にもう一つぶら下げた上条当麻と青年は住宅街にいた。予想外の買いい物が出来た上条当麻は上機嫌で鼻歌交じりに歩き、その後ろを両手がふさがった上条当麻に代わって青年は鞆を持って歩いていた。

「かまわない。行く当てもなかったのにな」

記憶喪失で行く当てもなかった青年にとっては、目的と言うもの

があるだけで何か違った。この荷物を少年の家まで運ぶと言う小さな目的。

しかし、それは終わってしまえば、また当てもなく歩く羽目になるだろう。

なんせ、記憶がないのだから。

少しして、上条当麻の指示あって一つの建物へ向かっていく。

建物の見た目はワンルूमマンションで、四角いビルの壁一面に直線通路とドアがズラリと並んでいた。

二人はオートロック式の入り口を抜けてエレベーターへと乗り込んでいく。

と、ここで上条当麻が徐に口を開いた。

「自己紹介、まだだったよな。俺は上条当麻。あんたは？」

七階で止まったエレベーターはガコガコといった古びた音を立ててドアを開く。そんなドアを押しつけるように上条当麻は通路へと出て行き、青年もそれに続く。

「名前……」

青年はぼそりと呟いた。

「そう名前だよ。あんたの名前」

隣のビルとの距離が二メートルの通路を歩きながら上条当麻は振り向くことなく言う。

(……名前)

自分自身の事で唯一覚えているモノ。

その名前をゆっくりと、そして自分に言い聞かせるように呟く。

「私の名前は……」

「え……？」

名前を聞いて上条当麻の足は自室の直前で止まった。

耳を疑ったのだ。本当にその名前がこの青年の名前なのかどうかを。

上条当麻は自らの目で再び確かめる様に振り返った。

「私の名前は……アウレオルス」

アウレオルス^{II}イザード

その男の名は……（後書き）

原作ブレイクは初めてですので、頑張りたいと思います。
ご感想やご意見お待ちしております。

アウレオルスⅡイザードだった男

アウレオルスⅡイザード

「何で……お前がこんな所に！」

上条当麻は言葉を発して、しかし改めてその顔を確認する。

その顔はやはり上条当麻の知っているアウレオルスⅡイザードのものではなかった。

（そう言えば……ステイルが魔術側の目を欺くために顔を変えたって言ってたっけ？ それに確かこいつは ）

「君は私の事を知っているのか？」

かつてアウレオルスⅡイザードは上条当麻に破れ、全ての記憶を失ったのだ。

「ならば教えてくれ。私は……アウレオルスⅡイザードと言う男はどんな人間だったのだ!？」

上条当麻はすぐに言葉が出てこなかった。本当の事を話して良いのかを迷ったのだ。「自分の友達を殺そうとした男」突然そんな事を言われた日にはショックは大きいだろう。

増してアウレオルスⅡイザードには記憶が無い。以前の自分がそんな人間だったと言う事を聞かされればどれほどの衝撃を受けるだろうか？

その気持は痛いほど上条当麻には分かっていた。なにしろ上条当麻も記憶喪失なのだから。

「お前は……かつて俺の友達を殺そうとした男だ」

「な……に……?」

しかし上条当麻はだからこそ真実を伝えた。もしも自分が相手の立場なら真実を伝えてもらいたいと思ったからだ。

「私は……そんな人間だったのか……」

驚いたアウレオルスはすすくさま落胆の色を見せた。それはそうだろう。自分自身を知るための情報、その一つ目が「人を殺そうと

した」では自分が一体どんな人間だったのか、知ることすら怖くなく
つてしまはずだ。

もしかしたら自分とはんでもないダメな人間だったのかもしれない。
そうアウレオルスが考えはじめると

「でもお前は一人の少女を助けるために全世界を敵に回した男でも
ある」

訊けば、アウレオルス「イザード」と言う男は魔術師だったらしく、
その中でも錬金術師と呼ばれていたそうだ。

なんでも、ある一人の少女（名をインデックスと言うらしい）を
助ける為にローマ正教と言う組織から離反し世界を敵に回した。

さらに、アルス・マギナ黄金錬成と言う、頭の中で思い描いたものを現実に引
張り出す魔術を使ったそうだが、それを使って上条当麻の友達を殺
そうとしたらしく、その際に上条当麻に破れ記憶を失ったようだ。

そして本来なら処刑されるハズが顔を変える事によって生き延び
た、と言うことらしい。

「魔術」と言うフレーズは頭の中にあつた。魔術師と言う存在が
いると言う知識はあるようで、ただ自分自身がその魔術師だったと
言う事に関しては驚いていた。もっと驚いているのは、かつて自分
の敵だった者に対してなぜこの少年はこれほどまで真実を伝える事
が出来るのだろうか？ と言う所だ。自分の記憶が無くなったのも
上条当麻に敗れた為だと言うが、正直上条当麻の友達を殺そうとし
た自分に問題があるので、責める気にはなれない。それにこうして
生きている事だけでも感謝しなくてはならないのかもしれない、と
以外に冷静な自分がいる事にも驚きだ。

「俺が知ってるのはこれくらいだけど、お前を昔から知ってる奴に
聞けばもっと分かると思うけど」

しかしアウレオルスは「いや、いい」と首を横に振った。聞いた
所でこれ以上何かが変わる訳でもない。それに自分は人を殺しそう
になった人間なのだ。それ以外の何者でもない。

アウレオルスが顔を曇らせていると

「確かにお前は俺の友達を殺そうとしたけど、お前は命がけで一人の少女を守りたいと思える奴だったって事に変わりはないぞ」

アウレオルスは啞然としたが、構わず上条当麻は言葉を続けた。

「あの時をお前は色々とおあってどうにかしまつてた。だから仕方が無いって訳じゃないけど、本来のお前は誰かを守るために命を賭ける奴に変わりはない。現に世界を敵に回してまでインデックスを助けようとしていたんだからな」

「とうま？」

と、ここで会話に割り込むように小さな声が部屋の中から聞こえてきた。

「うう、とうま、帰ってきてるなら早くご飯にしてほしいかも……って、とうまのお友達？」

扉を開けて外へと顔を出したインデックスは今にも倒れそう、と言う表情でご飯を要求すると共にアウレオルスの姿を見て上条当麻に質問する。

さすがに本名を言うのはマズイと上条当麻は考える。インデックスは記憶を失う前のアウレオルスと認識があるからだ。完全記憶能力を持つインデックスにこの目の前の男がアウレオルス「イザード」と言う事を言ってしまうとまずいと判断した上条当麻は咄嗟に

「あ、ああ、そっぴやインデックスは初めてだったよな。ええっと、あ、アルスって言うんだ」

アウレオルスを省力してアルスなのか、アルス「マクナ黄金練成のアルスなのか、今一捻りの足りない偽名でアウレオルスを紹介した。

「アルス？ 外人？ それともハーフか何かかな？ でも私はそれより今はご飯のが大切かも」

「インデックス……人がせっかく紹介してるのにそれはないだろ？ それに心配しなくてもほら」

と上条当麻は両手に抱えたレジ袋をインデックスの目線に合わせてるように軽く上へと上げる。

「何々?? どうしたのとうま!? 貧乏なハズなのに今日は珍し

く豪勢っぽいんだよ」

「う、貧乏なのは余計だろ。まあ確かに貧乏学生だけど……今日は違うぞ、今日はアルスのおごりだ！」

「やっぱりとうまのお金じゃないだね。珍しいと思ったんだよ。最近家計簿と睨めっこしてるとうまがそんな豪勢っぽいのを買えるはずがないんだよ」

ええいうるさい、と上条当麻は叫ぶととりあえずインデックスを部屋の奥に戻らせる。

「今の少女が……」

「ああ、インデックスだ」

どうやら今の白い修道服に身を包んだ少女が、かつての自分が助けたかった少女の様だが、やはりアウレオールの記憶にはなかった。皮肉なものだ。とアウレオールは思う。世界を敵に回してまで助けたかった少女だったハズが、今では顔を見ても何も思い出せない。そしてふと考える。

「という事は、あの少女は君によって救われたのだな」

「でも、誰が助けたなんてもんはあんまり関係ないだろ。さっきも言っただけど、インデックスを助けたかったって気持ちは俺もお前も変わらねえよ」

そうか、と呟いてアウレオールは一瞬笑みを作った。

そして上条当麻に背を向けてその場を後にしようとした。

かつて自分が助けたかった少女は既に救われている。つまりは過去の自分の目標は既に達成されている。これ以上ここにいたとしても迷惑になるだけかもしれない、とアウレオールは考えていたが、「おいおい、どこに行くんだよ。これお前の分も含まれてるぞ？」

と、上条当麻は再び両手のレジ袋を軽く持ち上げる。

「しかし、私がいては」

「飯を食べる事は関係ないだろ？ これはお前が買ってくれたんだから食べる権利は十分あるぞ、寧ろ食べてくれたほうが気を使わなくてすむ」

この少年は……

再び笑みを作ったアウレオルスは思う。

（話しを聞いたただけだが、過去の私とこの少年の違いはここにあるのだろうか）

アウレオルスはそんな事を考えながら上条当麻に後に続いて部屋へと入っていった。

（さて、どうしたもんか……）

隣の建物の屋上から一部始終を眺めていた金髪にサングラスと言う格好の少年、土御門元春は徐に携帯を取り出し予め登録されている番号を呼び出し携帯を耳に当てる。

程なくして繋がった電話の向こうから男の声が聞こえた。

『何の用だい？ 特に上からの指令も何も出ていないはずだけど』

「ああステイル、今回は個人的なお話ぜよ」

『……僕は男性とゆっくりお喋りする趣味は無いんだけどね』

「アウレオルスⅡイザードが現れた」

『なに？』

「正確にはかつてアウレオルスⅡイザードと呼ばれていた男と云うべきかにはー」

ありえない、と電話の向こうでステイルⅡマグヌスは言う。なんせアウレオルスⅡイザードはステイルが自分の手で殺したからだ。

ここで言う「殺す」は単に命を奪うと言うことではない。

アウレオルスⅡイザードは記憶を失った。そこにステイルの力で外見を変形させる。中身も外見も違ふとなればその人間はアウレオルスⅡイザードとは呼べず、まったくの別人となってしまう。つまりアウレオルスⅡイザードと言う人間をこの世界から殺すと言う事になる。

そういう意味での「殺す」

「なんなら、写真でも送って自分の目で確かめてみるかにゃー？」

そう言って土御門元春は手際よく携帯電話を操作に写真をステイルへと送信する。そして数秒後折り返しの電話が土御門元春へと来

た。

『……間違いない。アウレオルス「イザード」だった男だ』

「どうやら自分がアウレオルス「イザード」だったと言う事は思い出しているみたいだぜい？」

『バカな、なぜそんな事が？』

「詳しくは分からない。だが思いあたる点がない訳じゃないぜい」
『どういう事だ？』

「なあに難しい事じゃない。人間の脳は思いのほか優れているって話しだにゃー。あの男がどれほどインデックスを助けたいと思っていたか、何てことはステイル、お前が一番分かっているはずだぜい」
『……何が言いたい』

「世界を敵に回してまで助けたかった存在だぜい？ 記憶を失ってもその気持ちは脳のどこかしらの部分に残っていたんじゃないかって話だにゃー」

『つまり君は、インデックスを助けたかったと気持ちは何らかの形で記憶を取り戻す引き金になったとでも言いたいのか？』

ふざけてる、とステイルは言葉の後に付け足した。

「皮肉にも当の本人はインデックスの事、いや、自分に関わりのあった物は思い出せていない様子だったか……」

『で、君はこの事を上に報告するのかい？』

「まあ、様子見ってとこですたい。何せ相手が相手だ。アウレオルス「イザード」が生きていたとなれば大騒ぎだぜい」

『まあ、懸命な判断ってとこだね。僕もすぐにそちらに向かうとするよ』

電話はそこで途切れた。

携帯電話をポケットへとしまった土御門元春は再び視線を落とすた。

（さて、一先ず奴が何を考えているのか知る必要があるんだが、まあ頃合を見計らって直接会って見るのも良し）

鼻で笑うように息を漏らす。

「今回はかりはどつなるかこの土御門元春にも分からないぜい」

アウレオルス「イザード」だった男（後書き）

さてさてこの物語、どうなっ
て行くんでしょう？

突っ込みどころ満載かもしれ
ませんが、多少はご了承ください。

黄金鍊成

おっふる　おっふる　いつも以上にご機嫌なインデックスは洗面器を両手に抱えながら上条当麻の数メートル前を歩いていた。「あのジャパニーズ・セントーをあがった後に飲むコーヒー牛乳が格別なんだよね」

と言いながら振り返るインデックスに上条当麻は笑顔で答える。「その後にデザートなんかを食べたら最高かも」

数十分前に一人で五人人以上食べた人間の口から出る台詞とは思えない、と上条当麻の少し後ろを歩くアウレオルス「イザードは思う。」

買い物をする際に

『少し多めに買っておかないと俺達の分がなくなっちまうかもしれないんだけど……大丈夫？』

なんて事を言っていたが、その通りにしておいて正解だったようだ。ちなみに夕食は鍋だった。

「一体あの体のどこにあれだけの量が入るのだろうか……？」

上条当麻の言う話しでは、インデックスには完全記憶能力というモノがあるらしく、彼女の頭には一〇三〇〇〇冊の魔道書が記憶されているらしい。それを管理するために大量のエネルギーを使っているのではないか、と言うのが上条当麻の予想だそうだ。

確かに、インデックスの体はラインが細く、食事の量の割りに脂肪が付いている訳ではない。それどころか、脂肪が付かなければならない部分にもついていないのが、食べたエネルギーが他に回されている証明ではないだろうか？

「ねえねえとうまとつま。早くジャパニーズ・セントーに行こうよー。もうコーヒー牛乳とデザートが待ちきれないかも」

「って、デザート買うのは決定事項かい！」

インデックスに対して突っ込みと入れる上条当麻であったが、当

のインデックスはトコトコと一人で先へと駆け足で行ってしまう。って話を聞けー、と叫ぶ上条当麻であったが、その顔はどこか暖かいものに包まれていた。

まったく、と頭を掻きながらと上条当麻はアウレオルスの視線に気がつき

「どうかしたか？」

「いや、今日初めて聞く会話のハズなのだが、そんな会話が二人にとって当たり前のように見えてな」

「んーまあいつもではないかもしれないけど、大体はこんな感じなんじゃないかな？ 振り回されっぱなしって感じだけだな」

「それにしても満更ではないって顔をしているぞ」

そうか？ と上条当麻は首を傾げるが、それほどこんなやり取りが日常のモノになっていると言う事だろう。

「ってかインデックスのやつ、先々行っちゃまいやがって」

と上条当麻は何やら財布の中身を確認して、

「悪いアウレオルス、ちょっと先にあるコンビニでお金を下ろして来るわ。インデックスにも追いつかないと行けないし先に行つてくれ」

そう言い残して上条当麻は駆け足で一〇〇メートルほど先にあるコンビニへと向かって行った。

一人になってしまったアウレオルスは改めて回りを見回してみる。時間も遅い為か辺りに人の気配は全く無い。風力発電用のプロペラが風の力を受けて道の真ん中で回っているのがただ見えるだけ。

インデックスもかなり先まで行ってしまったらしく、無人の通りが続くだけだった。

（さて、私も上条当麻の言う通り先に行くでしょう）

と、次の一步を踏み出した瞬間

「初めましてだにゃー、アウレオルス「イザード」

気配も何もなかった背後から突然と声が響いた。

アウレオルスは咄嗟に後方へと振り返る。そこには金髪にサング

ラス、アロハシャツにハーフパンツと言う男が立っていた。

「誰だお前は」

「土御門元春、って言っても分かるはずないよな。もともと面識があつた訳でもないし」

「……これから深い眠りにつくヤツに自己紹介しても無意味だつて話しだぜい？」

「な!？」

アウレオルスが言葉の意味を捉え、理解しようとしていた時には既に土御門元春はアウレオルスの懐へと入り込んでいた。

アウレオルスは咄嗟に後方へと移動しようとしたが、足が地面に縫い付けられた様に動かない。土御門は懐に飛び込むと同時にアウレオルスの足を踏みつけ身動きの取れない状態にしたのだ。

全くの無防備な顎へと土御門の拳が突き刺さる。

同時に踏みつけていた足を離し、アウレオルスは一瞬にして宙を舞った。

「が……は……っ」

地面に背中を叩きつけ、肺に溜まっていた酸素を全て吐き出す事になる。

「様子見つて方法もあつたんだが、よく考えればアウレオルス、お前は危険すぎる」

首だけをどうにか上げようとするアウレオルスを土御門は見下ろすように言葉を続ける。

「頭で考えた通りに世界を歪めるアルス・マゲナ黄金練成もそうだが、それ以前にアウレオルス「イザード」と言う男が生きていると言う事が危険なんだ。悪いが気づかれる前に片付ける事にさせてもらったぜい」

痛みに耐えながらもアウレオルスはようやく上半身を起こす事が出来た。

記憶を失う前の自分が一体何をしてきたのか？ あの少女を助ける為に世界を敵に回した、上条当麻の友達を殺そうとした。聞いたのはその程度の事しかない。

ただ、この目の前にいる男は以前のアウレオルス「イザードと言
う男を知っていて、その男が危険だと言っている。

そしてこの男は片付けると言った。

つまりは

(私を……殺す気か)

土御門は地面を踏みつけ勢いよく駆け出し、足を振り上げた。

(くそっ)

上半身を起こしたただけのアウレオルスができる事には限りがあっ
た。土御門が繰り出す蹴りに対して両手を前で交差し防ぐ事くらい
しか出来ない。

しかし、アウレオルスの行動を予想していた様に土御門はその蹴
りをワザと空を切らせ

(蹴りは囷!?)

無防備な側面から回し蹴りを放つ。

肩で受け止める形になったものの、アウレオルスはその反動で地
面を三回も四回も転がる。

「さて、そろそろ仕留めに行くぜい」

土御門はそう呟き、立ち上がったアウレオルスへと一気に間合い
を詰める。

放つ技はフックと見せかけてのフレインシェイカー後頭部攻撃。空手やボクシングで
も反則とされている技。

最早アウレオルスとの一メートルまで迫っている。

そしてアウレオルスへ初撃であるフックを放とうとして

- - 止まれ

「な………に………!?!」

アウレオルスに拳が届くまで五〇センチもなかった。しかし土御
門はその場から動けない。アウレオルスの「止まれ」と言う一言に
体が石化した様に動かなくなってしまった。

(まさか……)

土御門は驚いていたが、それ以上にアウレオルスも驚いていた。

(今のは……???)

無意識、反射、そう言った言葉が合うのか。体が勝手に動いたと言っよりも言葉が勝手に出たと言っ方が正しいのか。

確かにあの瞬間、アウレオルスは土御門が止まればいいと思っただかもしれない。

それが言葉となり、そして現実を歪める。

(まさか……)

- - アルス……マクナ
黄金練成……!?

パチン、と効果が切れる様に再び土御門の体が動き出す。

本来ならばフェイントに使うはずだったフック。しかし忽然の開放にその拳はそのままアウレオルスを捕らえる。

アウレオルスも突然の事に反応できず、土御門の拳が頬へと突き刺さった。

飛ばされたアウレオルスは地面をゴロゴロと転がる。

(まさか、黄金練成まで……)

放った拳を少しの間見つめ、何かを思考していた土御門は

「こりゃ、拳だけじゃ足りないみたいですよ」

懐からフィルムケースを取り出し中身をばら撒いた。

「それではみなさん場ヲ区切ル事。タネもシカケも紙吹雪ヲ用イ現世ノ穢レヲ被工清メ楔ヲ通シ能あれ場ヲ選定」

辺りに一センチ四方の四角い紙片が大量に舞い上がる。

「本日の舞台はこいつ界ヲ結ブ事。まずはメンドクセエ四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン」

空気が変わった。静かな夜にさらに静けさを上乘せしたようなモノに。

「それでは折紙ヲ重ネ降り紙トシ式ノ寄ル辺ト為ス」

言葉に続くように土御門は新たに四つのフィルムケースを取り出す。中には亀、虎、鳥、龍、それぞれの小さな折り紙が入っており、それを自分を中心に四方へと放り投げる。

「はたらけバカども 四獸二命ヲ。北ノ黒式、西ノ城式、南ノ赤式、東ノ青式」

言葉に反応する様に四つのフィルムケースは光を発し、部屋を模るように光の壁を作り出す。

「ピストルは完成した 式打ツ場ヲ進呈。凶ツ式ヲ招キ喚ビ場ニ安置」

部屋を模った壁は、黒、白、赤、青、それぞれ折り紙の色に合わせ輝き始める。

「弾丸には 丑ノ刻ニテ釘打ツ凶巫女、其ニ使役スル類ノ式ヲ」

光はさらに輝きを増す。

「ピストルには 人形ニ代ワリテ此ノ界ヲ。釘ニ代ワリテ式神ヲ打チ。槌ニ代

いにはワリテ我ノ拳ヲ打タン」

「土御門ー！！」

振り返る先には上条当麻の姿があった。

「土御門、アウレオルスをどうするつもりだ！？ それになぜ魔術を」

「言つてなかつたかにや、俺も必要悪の教会の一員ぜよ」

土御門は未だ地面に倒れるアウレオルスを見つめながら

「カミヤん、アウレオルスは危険なんだ。ただでさえ世界を敵に回した男だぜい？ そんな男が生きていると魔術側に知られでもしたら、魔術側は学園都市ごとヤツを破壊する可能性だつてあるんだにやー。それにあいつは黄金練成アルス・マグナの力も取り戻しつつある」

いや、と土御門は付け加え

「俺の予想ではあれは本来の黄金練成じゃない。本来の黄金練成は考えた通りに世界を歪めてしまうモノだったハズ。どんな事でもだ」
土御門はアウレオルスを見つめたまま続ける。

「それなら、既に現実にかかしの影響を与えているハズだ。発動したのは偶然かもしれないが、ヤツはその時言葉を発した」

「けど、以前のアウレオルスも言葉を発していたぞ」

「確かにそうだにや。しかしステイルの報告ではアウレオルスは思考を固める為に言葉を発していた。不安を解消させる為に鍼まで常時して、違うか？」

「そうだ。と上条当麻は思い出す。

アルス・マグナ

黄金練成は思った事をそのまま現実にする事。ゆえに自分にマイナスになる事さえも現実にしてしまう事から、かつてのアウレオルスは鍼を使用に言葉に出す事で思考を固めていた。

アルス・マグナ

そして冷静さを失い、自らの黄金練成で敗北したのだ。

なら今のアウレオルスはどうなのか？

「じゃあ今のあいつは……」

「多分、言葉に出す事が発動のキーになっているハズだ。それが中途半端に記憶を取り戻した脳が術式を書き換えたか、敗北から得た知識なのかは分からないがな」

まったく、と土御門は付け加えて

アルス・マグナ

「記憶が不完全、その為黄金練成も不完全、ゆえに最強となつてしまった。分かるか？ カミヤん。アウレオルスはここで始末しておかなくちゃならねんだ。アルス・マグナ黄金練成を使いこなせていない今のうちに、例え俺の体がどうやってもな！」

その時上条当麻は初めて気がついた。

土御門の立っている地面に血が滴り落ちていている事に。

「土御門！ 能力者が魔術を使うつちまうと」

「無事ではすまない。下手すると一発でお陀仏だにやー」

能力者に魔術は使えない。

脳の回路の違う者が魔術を使おうとすると体の中から破壊されてしまう。

「止める土御門！ 今のアウレオルスは以前とは違う！ お前が魔術を使ってまで倒さなくちゃいけないような、悪いヤツじゃねえ！」

「カミヤん、この赤ノ式は超距離砲撃用の魔術だ。範囲状の物体を吹き飛ばし全てを破壊する。それをこの距離で打つんだぜい？ 例え魔術を使って生き残ったとしても、その威力に巻き込まれたらおれは死ぬ。……俺は本気なんだ」

地面には大量の血が溜まり、今のなお口から、頭から血が流れ落ちる。

「それともカミヤン。その幻想殺^{イマジンプレイカー}しでこの赤ノ式を破壊するのかい？ 例え破壊した所で今の俺は出血多量で立つてるのがやっと。後は術式の発動させる事しか出来ない様な状態だ。赤ノ式を止めた所で大量出血で死亡確定。俺を犬死させるつもりならそれでもかまわねえぜ」

朦朧とする意識の中、アウレオルスは会話の全てを聞いていた。どうやら自分の存在と言うのはこの目の前の男が命をかけなければならぬほど危険なモノらしい。

それならいっそ、このまま流れるままに身を任せてしまった方が良いのではないか？ とアウレオルスと思う。

しかし、頻りに上条当麻は何かを叫んでいる。

あの少年はこの場において二人ともが助かる事を望んでいるのだ。
(なら……私にできる事は……)

目の前の少年は例え自分を殺さなくても死んでしまつと言っている。

(上条当麻は私だけが助かって喜ぶ事はない)

かといって、このままでは二人とも、下手をすれば上条当麻すら巻き込んでしまう可能性だつてある。

アウレオルスは二人の会話を思い出す。

アルス・マクナ

黄金練成は考えた通りに現実を歪めてしまつ。そして今は言葉がその発動キーになっている。

(なら……私にできる事は……！)

イメージしろ、あの少年の姿を。

思え、あの光の壁が無いこの場所を。

言葉に出せ、発し現実を歪めろ。

それで救えるのなら。

(元に)

戻れ

瞬間、土御門を覆っていた光の壁が消え去り、辺りを元々の静寂な空気が包み込む。

そして、土御門は自分の体の異変に気がつく。

「傷が……まさか……っ」

土御門が視線を抜ける先には地面に倒れていたアウレオルスが、震える両手を支えに立ち上がるうとしていた所だった。

「どうやら……私自身の事を忘れていたようだ」

「まさか……この短期間で黄金アルス・マグナ練成を使いこなしたのか」

チツと舌打ちする様に、再び土御門はフィルムケースを取り出し、しかし、そこで視界を遮るように上条当麻が割って入った。

「土御門、もう止めるんだ」

「邪魔をするなカミヤん。見ただろ？ こいつは最早黄金アルス・マグナ練成をも使いこなしちゃった。今やたった一言で人を、世界を殺せる力を再び手に入れちゃった。もう俺の命だけでも足りないくらいだぜい」

上条当麻は土御門の目を見つめる。その瞳はサングラスによって遮られてあるが、そのサングラス越しに土御門がどれほど本気かと言うものがビリビリと伝わってきている。

なら、と上条当麻は呟く。

「アウレオルス！」

上条当麻は背を向けたまま叫ぶ。

「俺と今、約束しろ！ その力を他人を犠牲にしたり人を傷つける事には一切使わないと！ かつてお前がたった一人の少女を救いたいと願ったように！ その力を人を助けるために使うと！ 今ここで約束しろ！」

「カミヤん、それでこいつがその約束を破ったらどうするつもりだ？」

「俺が止める。頭ぶん殴って、這いずり回ってでも止める」

言うだけなら簡単だがにゃー、と土御門は呟く。

「アウレオルス、お前はどなんなんだ！？ 俺とここで約束するのか！？」

上条当麻は振り返りアウレオルスを見つめる。

アウレオルスには首を横に振る理由などなかった。

かつての自分はとうだったのか、それは思い出せない。だが、こうして上条当麻と出会い、一瞬でもこの少年の様に生きてみたいと思う自分がいた事は確かな事だ。

だからこそ、首を縦に振る。

「ああ、約束しよう。この力、人を傷つける為には使わないと」

その言葉で、上条当麻の顔の緊張は解れていく。

「土御門、これでいいだろ？」

土御門は険しい表情を解くことをしばらく止めなかったが、ハアと深々と息を吐ききると、

「まったく、素人が勝手に決めやがって。もし魔術側にアウレオルスの存在がバレたらカミヤんはどうする気ぜよ？ 一人でどうにかなるってレベルじゃないんだぜい？」

アルス・マゲナ
黄金練成があれば何とかなるかもしれないがにや、と付け足して

「まあ、その辺に関しては俺に任せておけて事ですたい」

「土御門」

さあて、と大きく背伸びをするように土御門は腕を上げると

「これから忙しくなりそうだぜい」

土御門は呆れるように、そして笑うように言う。

「かつて敵だった男にここまでなれるとは。正直カミヤんには適わなえよ」

皮肉にも聞こえる言葉だったが、どこか嬉しそうに見える土御門がそこにはいた。

黄金錬成（後書き）

無理やり過ぎましたかね？
ある程度はご了承ください

とあるファーストフード店内で

学園都市には二三〇万人の人間がいる。その八割が学生であり、能力の強さに応じて無能力者レベル0から超能力者レベル5の六段階に分けられているのだが、実際は六割以上が無能力者レベル0であり、トップの超能力者レベル5は現在七人しかいない。

そんな中でも割と多い部類、低能力者《レベル1》に属する一人の少女、初春飾利がとあるファーストフード店の一角でパフェを目の前に目を輝かせていた。

「で、話しと言つのは何のですの？」

その正面に座っている白井黒子は、最早目の前のデザート以外視界に入っていないさそうな初春飾利の表情に、半分呆れたような声で話しかける。

「はのでふね、ほほさいひん」

「ああもういいですわ、食べ終わってからで結構」

ジャッジメント
風紀委員

学園都市の治安を守る警察的組織の一つ。学生だけで形成されており、基本的に校内の治安維持にあたっている。

名前からも分かるように、主に校内での事件を管轄とし、その事から支部はそれぞれ各学校内に設置されている。入室の際に指紋、静脈、指先の微振動パターンの三種をクリアする必要がある辺りはさすがは学園都市と言えるだろう。

現在口の中にパフェを頬張っている初春飾利も第一七七支部に所属する風紀委員ジャッジメントの一人なのだが、見た目によらず学園都市屈指のハッカーであり、風紀委員ジャッジメントの資格を得るための十三種の適正試験では、情報処理の一点突破で切り抜けたほどの実力の持ち主だったりする。

「白井さんは食べないんですか？」

「生憎、わたくしには太る趣味はございませんので、どうぞお一人で余分な脂肪をお付けになって下さいな」

対する白井黒子も風紀委員の一人で、学園都市に五八人しかいない空間移動能力の使い手でもあり、風紀委員ジャッジメントにおいての初春飾利の一つ先輩でもある。ちなみに、年齢では二人は同じ年だ。

「そんな言い方ひどいですよ」

にも関わらず初春飾利が白井黒子に敬語を使うのは、先輩・後輩関係というよりもどちらかと言えば性格の影響が大きいらしい。

相変わらず順調なペースでパフェを口へと運ぶ初春飾利に対して、白井黒子は少し疲れた表情でため息をつく事が多かった。

そんな姿を見てか

「白井さん元気ありませんね。もしかして無理に我慢してないですか？」

「食べます？ と初春飾利はパフェの乗ったスプーンを白井黒子へと差し出すが、

「そんな事で苦勞出来るのならそちらのありがたいですわ」

と、ため息を一つ吐き

「特例で始末書くらい免除して下さい。ホント、毎度毎度あんなものを書かされてはこちらの身がどうにかなりそうですわ」

風紀委員ジャッジメントは基本的に校内の治安維持を管轄とする為、校外での活動をジャッジメントした際には始末書を書かされるのだが、

「そうですね。最近、能力者や武装無能力集団スキルアウトによる事件が頻発していますからね」

ここ最近、学園都市内の治安が乱れているらしく、管轄外である校外にも風紀委員ジャッジメントが出て行かなければならない場合が増えているのだ。

警備員アンチスキルが言うには年に稀ではあるがこう言う時期があるのだとか。偶々武装無能力集団の行動が重なったり、壁に行き詰まった能力者が連鎖反応の様に事件を起こしたりする為らしいが、正直程々にしてほしいと白井黒子は内心想う。

「そんな事に使う元気があるでしたらもっと別の事に使えばいいも

のを。とんだ迷惑ですわ」

と白井黒子がため息混じりに発言していると、視界によく見知った姿が飛び込んで来た。

「オッス黒子、初春さんもこんにちは」

「御坂さん、こんにちは」

御坂美琴。

常盤台中学に所属する三年生で、学園都市に七人しかいない超能力者の第三位、超電磁砲。

白井黒子がもつとも憧れる存在でもある。

「まあ〜お姉様。どうしてこんな所へ？ さあさあどうぞお座りになつて下さい」

ありがと、と御坂美琴は白井黒子の隣へと腰を下ろし、

「おっ、美味しそうなパフェ発見。一口いただき」

パクつと初春飾利が使っていたスプーンでパフェを口へと運ぶ。

「ん〜美味しい」

「そうですね〜。それなのに白井さんはいらないうって言うんですよ」

「何黒子？ あんたダイエットでもしてる訳？」

しかし、今の白井黒子の耳にそんな会話は入って来なかった。

（あ、あ、あのスプーンは先ほどまで初春が使っていた物……つまり、間接キス！！ おのれ、初春……っ！）

ゴオオオ、と何やらどす黒いモノが湧き上がって、そしてハツとする。

「そうですね。確かにお姉様は初春と間接キスをしてしまいました。が、あのスプーンを最後に使ったのはお姉様。つまりあのスプーンをこのわたくしが使えば、お姉様と間接キス！！ パフェを食べるフリをしてスプーンさえ手に入れれば……うっへっへ、ぐへへへ」

その内容が全て口から漏れ、隣にいる御坂美琴に全て聞こえてしまっている事に気がつかず、白井黒子は更に妄想を膨らましていく。「そう言えば、どうして御坂さんはここへいらっしやっただんですか

？」

パフェの残り一口を食べ終え、初春飾利は質問する。ちなみにスプーンは白井黒子が妄想に耽っている間に初春が普通に使用。白井黒子の妄想は妄想のまままで終わってしまった。

「ん？ 私？ 私は偶々この前を通り過ぎた時に二人が見えたから寄ってみただけ。そう言う二人はやっぱり風紀委員関連？」

と、ようやく我に返った白井黒子が何かを思い出したように、

「そう言えば初春、話して言うのは何だったんですの？」

はい、と初春飾利は足元に置いてあった鞆からノートパソコンを徐に取り出して、

「白井さんも先ほど言われていたここ最近の能力者や武装無能力集団スキルアウ達による事件のことなんですけど」

キーボードを叩くと画面に様々な画面が現れ、文字が流れるようにスクロールしていく。

「ああ、最近事件が多いってこの前誰かが言ってたっけ」

「ええ、偶々こう言う風に事件が重なる時期があるとかで。それとも初春、やはり何か原因があるとも言うのですの？」

「いえ、関連となる原因な恐らく無いと思われませう。犯人の事情聴取でも一貫性は無かったそうですから」

とりあえずこれを見て下さい、と初春飾利は画面を二人へと向ける。そこには一つの動画が移されていた。最近の事件の犯行時の映像だろうが、犯人らしき人物が風紀委員であるう生徒に取り押さえられてる現場が映っている

「これがどうかしましたの？」

「ただ犯人を捕まえた所が映ってあるだけだけど？」

確かにそうなのだ。この動画にはただ犯人が捕まる所が映ってあるだけで、何か特別なモノがあった訳ではない。

それでも初春飾利は表情を変えずに画面を次々とクリックしていくが、出てくるのは同じように犯人が風紀委員、或いは警備員アンチスキルに捕まっている所ばかりである。

と、白井黒子はいくつかの動画を見ていて初めて少し違和感を覚えた。それを見計らったように初春飾利は言葉を発する。

「おかしいとは思いませんか？」

何が？ と御坂美琴は首を傾げるが、現場に幾度と無く出ている白井黒子には初春飾利が何を言いたいのかが分かった気がした。

「初春、最近の事件は全てがこの様な形に？」

「いえ、割合的には一割にも満たないですが、これもおかしい事に全てがこの第七学区に限定されています」

確かにおかしいと白井黒子は腕を組む。

「ねえ、一体何だつて言うのよ？」

一人だけ萱の外な御坂美琴は二人の間に割つて入る様に言う。

「お姉様はこれまでも何度か事件に首を突っ込まれた事がありますのですわよね？」

「首を突っ込むって何か嫌な言い方よね」

「……おほん、よく助けていただいた事がありますけど。その際、犯人をどのようにしてお捕まえになりました？」

ん、と御坂美琴は数秒考えて

「大体はビリビリって動けなくなったりとか、レールガン超電磁砲ぶつ放したり、とかかな」

あ、と御坂美琴はここで先ほど見たいいくつかの映像の違和感に気がついた。

「お気づきになられたみたいですね。ホント、よくこんな些細なことに気がつきましたわね、初春」

いえいえそんな事ないですよ、と初春飾利は首を横に振って

「私は偶々事件の整理をしている最中にドジな犯人さんばかりだなあ、なんて思ったのがきっかけですから。本当に偶然なんですよ」

「でもこれってただの偶然って可能性もあるでしょ？」

「ですがお姉様。犯人が揃いも揃って足を躓く、車が全輪パンクする、こんな事がこの第七学区だけここ数日の間に数件も起きるといふのは、些か不自然過ぎはしません事？」

初春飾利が表示した映像の全てが、ジャッジメント風紀委員やアンチスキル警備員が手を出す前に自ら墓穴を掘るように捕まっていたのだ。

「じゃあ何？　これが全部　」

「能力者の仕業。初春もそう思っているんですわよね？」

「断言は出来ませんが、ここは学園都市ですしそう考えた方が妥当だと思います」

「大方、テレキネシス念動能力或いはエアロシューター風力使用と言った所ですわね」

と、白井黒子は静かに言う。

全ての事件がそうでは無いことから、恐らく偶々通りかかった際に犯人を捕まえる手助けをしたのか。少なくともその能力者は第七学区で生活をしているハズだ。

ただよくよく考えてみれば悪いことをしている訳ではなく、寧ろこれは学園都市の治安を守るために役立つている事から良い事なのだ。

一体誰がこんな事をしているのか気にはなるが、

(わざわざ探る必要もなさそうですね)

と白井黒子が思っていると

「ねえ、その能力者強いのかな？」

「出ましたわ、お姉様の悪い癖」

何よお、と御坂美琴は頬を少し膨らます。

御坂美琴の悪い癖と言うのは、要するに何かあるとすぐに力試しをしたくなる、と言う点だ。

「だって、こうやって手助けをしてくるって事はかなりの使い手って事でしょ？　大丈夫よ、きっと向こうはいいヤツだろうし、ちよちよいつと手合わせをお願いするだけだから」

「手合わせすると仰いまして、お姉様は学園都市第三位。そんなお姉様とまともに戦える能力者なんて、そうはいませんですわ」

白井黒子が言うように、御坂美琴は学園都市第三位の超電磁砲。レールガン

まともに戦える相手など指で数えるほどもない。だが御坂美琴は例外を知っている。レベル0無能力者でありながら超能力者である御坂美琴

の攻撃を全て防ぎきった男を。

（そうよ、あいつだって無能力者レベル0でありながら私の攻撃を全て防ぎきった。今回の能力者だって戦ってみないと私の方が強いかなんて分からない）

と、御坂美琴はここで見知った顔が歩いているのに気がつき、そして

「いた！！ あいつこんな所に！」

バンとテーブルに手をつけて勢いよく立ち上がると、

「今日という今日は逃がさないんだから！」

一目散に店内から外へと飛び出して行った。

「お姉様一体どうしたんですの！？ くっ、初春、私達も後を追いますわよ！」

「あわわ、ちょっと待って下さいよお」

慌ててパソコンを鞆へとしまうと、初春飾利も白井黒子と共にフリーストフード店を飛び出した。

悪いけど今日は一人じゃないんだ

この少年は不幸だと思う。

一緒に歩いていけばブレーキの効かなくなった自転車が突っ込んで来るわ、公園で遊んでいる子供達が打った球が彼目掛けて飛んで来たり、取り出そうとした携帯電話が地面に落ちて外れたバッテリーが偶々通りかかった掃除ロボットに吸い込まれたり、（本体が無事だけでもラッキーだったらしい）

とにかく少年は隣を歩いている訳だが、ただ歩いているだけで最早ヘトヘトになっていた。

「何と言うか、君の不幸は筋金入りと言うべきか」

「欲しいなら分けてやってもいいぞ」

いや、結構。とアウレオルスは首を横に振る。

彼、上条当麻の右腕には幻想殺しと力が宿っている。それは超能力であろうが魔術であろうが、異能の力であればどんなモノでも打ち消してしまうと言う凄まじい力なのだ。

ただその代わり、神様の加護、つまり運と言われる様なモノまで片っ端から打ち消してしまっているらしく、そんな上条当麻には不幸ばかりが訪れると言う訳だ。

「つうか、まさかお前が隣の部屋に住み始めるとは思いもしなかったな」

あの夜、土御門と一時間後にこの場所で会う、と言う約束をし上条当麻とアウレオルスは銭湯へと向かった。案の定インデックスは先に行っていたのは良いもの、お金を持っておらず銭湯内に入ることが出来ない為、外で待ちぼうけをくらっていた。

そして銭湯の帰り、デザートを買うと言う名目でコンビニに立ち寄った際、外で土御門元春と合流。

そこに彼が持って来たのは一つの鍵だった。

その鍵こそが上条当麻の隣部屋の鍵であり、土御門元春が言うには

『近くに住んでいた方がこちらとしても監視が利くし、いざと言う時に行動が早くできるってものだ。カミヤんが面倒を見るって事もあるが、まあ手続き等はこちらで済ませてあるから心配するなって事です』

だそうだ。

簡単に言えば監視しやすいと言う事で上条当麻の隣部屋に移住させられたと言う訳で、どうやって学生でもないアウレオルスに学生寮が貸し出されたのは不明だが、土御門曰く自分にある特権みたいなモノを使っただけらしい。

「まあこつちとしてはインデックスの面倒を見てくれる人が増えたのはありがたいこつた」

「面倒を見ると言うより、あれは単なる食事係みたいなものだろう」
アウレオルスは学園都市の学生ではない。その為上条当麻が学校（夏休みの補修）へといっている間インデックスの面倒を見ていると言う訳なのだが、アウレオルスの言うようにそれは食事係に近い物がある。

常に口から出るのは『お腹が減った』と言う決まり言葉。その都度何かを作っては与えている訳だが

「ああアウレオルス、前にも言ったけど我慢させる事も大切だぞ。

じゃないとインデックスは我慢の出来ない子になっちまう」

「それもそうなのだが」

（あんな今にも空腹で死んでしまいそう、みたいな顔をされてしまふと何かを作ったあげたくなってしまふだろ）

ちなみにインデックスが言うには、料理に味はとうま以上まいか以下との評価。まいか、と言うのは土御門の義妹の事らしく、アウレオルスの反対隣に住む土御門に部屋によく訪れているそうだ。

「てか、アウレオルスは普段なにをしてる訳？ ずっとインデックスの面倒見て訳じゃないだろっし」

「ああ、とりあえず辺りの探索と言ったところか。知識としては残っているみたいなのだが、一度自分の目で見ておいた方がいいと思

つてな」

なるほど、と上条当麻は軽く頷く。

上条当麻も記憶喪失だからその気持ちは良く分かる。現に今も夏休みの補修のお陰で学校までの道のりや学校の見取り図も一通りのチエツクは完了している。下駄箱の位置もバツチリ。残る問題は自分の座席位置だけとなっているのだが、それだけは新学期になつてみないと確認の仕様が無い。

補修のお陰などと言っているが、本来補修は七月の段階で終わっているはずだったのだが、記憶を失う前の上条当麻はどうやらその補修に出席していなかったらしく、八月になつてもただ一人補修を受けさせられている。

「なんて言うか、不幸だ」

ぼそつと呟かれた言葉にアウレオルスが首を傾げていると、

「見つけたわよ！」

後方より声が聞こえた。

アウレオルスが振り返ると、そこには茶色の短髪に半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートの少女が何やら険しい表情でこちらを、正確には上条当麻を睨みつけていた。

上条当麻はその声を聞くが否や、片手で頭を掻きながらハアと深くため息をつく。

「で、何の用なんだ？ ビリビリ」

「わったっしっには、御坂美琴って名前があるって言ってんでしょうが！」

御坂が怒鳴った瞬間、その茶色い髪の先端から青白い火花が散った。

「おまえっ、またこんなところで！」

上条当麻が右手を突き出した瞬間、青白い雷撃の槍が上条当麻の右手を避雷針にするかのように襲い掛かった。その雷撃は上条当麻の右手に触れた瞬間弾けるように消滅する。

「あぶねえだろ！ 殺す気か！」

「あなたにしたらこれくらいどうって事ないんですよ」

「お姉様、どうなされたんですの？」

「レポート空間移動を使って追いついた白井黒子は御坂美琴を見つめながら訊ねる。

「黒子、邪魔しないでね」

御坂美琴は前を向いたままそう答えた。

白井黒子はその視線を追うように視線を移すと、そこにはツンツン頭の少年が立っており、その隣には染めた様に真っ黒なショートヘアの男が一緒にいた。

（そう言えば、こんな噂を耳にしたことがありますの。つい最近、お姉様が負けた。正確には勝てなかった能力者がいると。まさか、この男性のどちらかが？）

「つか、毎度毎度町のだ真ん中で電撃をぶっ放しやがって、もつと時と場所を考えろよ！」

「場所を移したらちゃん勝負してくれるのかしら」

御坂美琴の軽く上げた手の指先からはバチバチと青白い火花が絶え間なく血走っている。

（やっぱりそうですの。あのツンツン頭がお姉様が勝てなかった能力者ですのね）

「悪いけど、ただいまこの上条当麻さんは色々不幸なことの連続でお疲れモードなんです。現在もその不幸は継続中なんだけど」

今にも襲い掛かってきそうな御坂美琴とは逆に、ため息をついて一気にローテンションになる上条当麻。

「上条当麻。あれは一体何なのだ？」

一部始終を観覧していたアウレオルスは呆れたように上条当麻に訊ねる。

「ん？ ああ、まあストーリーカーみたいなモノかな？」

「だつれが、ストーリーカーよ！」

額から火花が散ると同時に、上条当麻目掛けて電撃の槍が放たれる。

しかしそれは上条当麻の右手に当たると弾け飛ぶ様に消滅した。

「ハア、不幸だ」

そう呟いて、頭を掻きながら上条当麻は数秒考えると

「アウレオルス……走れ！」

一八〇度方向転換して走り出した。隣にいたアウレオルスも二秒ほど遅れて上条当麻の後へと続く。

「ちょっと！ 待ちなさいよ！」

御坂美琴もすぐさま反応して追いかける。

上条当麻との距離は一〇メートルも無いが、一向にその距離が縮まる気配が無い。上条当麻は意外とタフだ。例えこのまま追い続けられても捕まえることは難しい。過去に一晩中追い掛けた揚句逃げ切られてしまった経験のある御坂美琴にはよく分かっていった。

（仮に電撃を放つても防がれちゃったら意味無いし、でも前に出れば ）

「お姉様！」

御坂美琴がチラツと後ろに視線をやると同じようして白井黒子も御坂美琴のすぐ後ろを走っていた。

「お姉様、理由はよく分かりませんが。お姉様が良いと言っているのであればこの白井黒子、手をお貸しいたしますわ」

そうね、と御坂美琴は細く笑うと

「じゃあお願い。私をあいつらの前に出して」

「まだ追ってきているようだが？」

後ろを振り返ったアウレオルスが上条当麻へ問いかける。

「くそお、本当にしつこい」

「相手をしてあげれば良いのではないのか？」

それはムリだ、と上条当麻はきっぱりと答えた。

「あいつの相手をしてたら今日の残り時間全てがそれだけで終わっちゃう。あいつは毎度一日中追い掛け回されるこっちの身にもなれっつてんだ」

確かにそれは大変だとアウレオルスは思う。ただ後ろを見ていれ

ば分かるように、向こうはこちらを捕まえるまで追っつきそうな雰囲気である。それに正直な所、このまま走り続けたら上条当麻より先に自分がへばってしまうだろうとアウレオルスは考えていた。

「なるほど、なら向こうが止まってくれれば話しは早いと言う訳だな？」

「アウレオルス、お前まさか」

「逃がさないわよ！」

上条当麻が何かを言おうとした瞬間、前方一〇メートルの辺りに突然と御坂美琴が現れた。

「のわっ」

急に現れた御坂美琴に反応して止まろうとした上条当麻であったが、ここでも不幸ぶりを発揮。地面に転がっていた小さな石ころに躓き、地面にヘッドスライディングをぶちかます。

「痛〜。くそ、空間移動か」

「そう言う事ですの」

ジャリッと地面を踏みしめながら、満更でもない表情で白井黒子は言う。

「残念だったわね、今回は私一人じゃないの。そう簡単に逃げ切れると思わないで」

「つたく、と腰に手を当てながら、御坂美琴は地面に座る上条当麻を見下ろす形で見つめる。」

前後を挟まれて逃げ場を失った上条当麻とアウレオルス。

そんな状況を見てアウレオルスは一步前へと踏み出した。

「アウレオルス、お前」

「分かっている。人を傷つける事に使わないと約束したであろう。今回もじつとしてもらうだけだ」

『も』と言う言葉の意味が今一上条当麻には分からなかったが、そんな上条当麻の疑問を知る由もなくアウレオルスは数歩前へ出る。

「何よあんだ。私が用があるのはそのツンツン頭だけなんだけど？」

「私も別に君に用はないんだが、このままだと私も上条当麻も埒が明かないのでな。君達にはここで諦めてもらおう事にしよう」

「何を言ってるのよ。巻き込まれなくなかったらそこを退いた方がいいわよ」

バチン、と髪の前から火花が飛び散る。

やれやれ、とアウレオルスは息を吐くと後方にいるもう一人の位置を確かめるように一瞬振り返ると、再び前を向き、

「双方　その場から動くな」

たった一言そう言い放っただけで変化は現れた。

「「な!?!」」

御坂美琴と白井黒子は驚愕した。

(「そんな。足が……」)

(「体が動きませんわ……っ」)

まるで金縛りにあったように二人はその場所に固定されたまま動けなくなってしまった。

「心配する事はない、直に動けるようになるだろう」

御坂美琴は幾度も足を動かそうと試みるが、地面と接着剤で固定されているかのようにビクともしない。

(「ちょっとどうなってるのよ!?!　これがあいつの能力??　でも動けないなら」)

「こいつでどうよ!」

バチン、と額から青白い電撃が飛び出した。槍となって放たれた電撃はアウレオルスへと向かい、しかしその直前に何か当たり弾ける様に消滅する。

「悪いなビリビリ」

そこには上条当麻が右腕を突き出して立ちふさがっていた。

「今日はこっちも一人じゃねえんだ」

状況の急変（前書き）

久しぶりの更新です。

状況の急変

「ふーん。ここが学園都市」

肩までかかるくらい赤い髪で、小柄な少女だった。

年齢は一四歳と言った所か。

まだ幼さの残る顔立ちだったが、同年代には感じられない女性らしさが見え隠れしていた。

白衣を着ていた。

しかし、普通のものではない。

白ではなく、青や緑、黄色などのカラフルな模様が描かれて、浴衣のようだ。

さらに、サイズが三つも四つも大きいのではないかと思えるくらいの白衣は、一見ドレスにも見える。

その服は、前のボタンをすべて閉めて、裾からは手は見えない。生地が五センチほど遊んでしまっている。

スカートの部分は、言うなればツバメだ。

後ろの部分に縦に大きく切れ目を入れて、前と後ろとは丈の長さが二〇センチほど違っている。

学校でこれを穿いていたなら、間違いなく階段ではスカートの中をのぞかれる事はないだろう。

ただし、上りに関してだが。

加えて、東洋ではないその白い肌が、彼女を日本人でないことを証明しているようだった。

学園都市の建物を見渡すような仕草をする彼女を見れば、誰もが外の人間だと分かるだろう。

ある建物を探していた。

一際目立つその風格で、大通りを通り交差点を渡り、目的の建物を探す。

「お、発見発見」

小柄な彼女は躊躇することなく、その建物の中へと足を進めていく。

「必要なものは早めに確保しておかなくちゃね」

上条当麻とアウレオルスはビリビリこと御坂美琴の追撃から逃れ、帰路へとついていた。

「へえ、お前そんなことやってたのか。でも力の使いすぎはよくないと思うぞ。ただでさえそれは科学の力じゃないんだからさ」

上条当麻は頭の後ろに手を組みながら、注意を促す。

「それは偶々が重なっただけだ。そもそもここは科学の最先端なのだろう？ ああ言った類の事件くらいどうにかならないものなのかね」

「まあ、大方そう言った事件を起こすのは無能力者だからな。俺も何度か間違われそうになったこともあるけど」

「……それは君の右手の所為だろう」

事件と言つのは、最近頻発している無能力者達スキルアウトが起こしている連続的な事件のことだ。

ただ、連続的と言っても関連性はほとんどなく、偶々連続して無能力者達の事件が立て続けに起こっているだけらしい。

この時期は事件が多いですね、などと言われる部類のものだ。

その事件にアウレオルスは少しながら貢献していた。

犯人と遭遇した際には、その犯人の足を躓かせたり、逃走している車があればそのタイヤをパンクさせたりと、誰かが何かをやっていると云う事が分からない程度に力を使用していた。

「しかし、あの少女達は何だったんだね？」

アウレオルスは素直に訊く。

上条当麻は冗談でストーカーなどと言っていたが、「うーん。一度能力を防いでからずっとなんだよな」

きつかけは不良に絡まれていた御坂を助けようとした事からだった。

もちろん、学園都市に七人しかいない超能力者の一人である御坂美琴にとつて不良の数人くらいあしらうのは簡単だ。

だが、そんなことを知る由もなかった上条当麻は、いつもながらの不幸振りを発揮したのは言うまでもない。

「それは……大変だな」

「だろ？ 会うたびに追われるこっちにもなってみろってんだよ」と、

「あれ？」

異変に気がついたのは上条当麻だった。

寮までの道は確かに人通りが少ない。

それでも、まったくいけないと言うのはおかしい。

「そろそろ慣れてもいいだろう。いつまで驚くつもりだい？」

現れたのはステイル「マグヌス」。

そのルーンによって刻まれた人払いによって辺りからは人がいなくなっていた。

「久しぶり、いや、はじめましてになるかな？ まあ一応礼儀として挨拶くらいはしておくよ、アウレオルス」

「君も、私の過去を知っているのだな」

「自分が顔を変えておいてあれだけど、本当なんの因果で中途半端に記憶を取り戻してしまったのやら。あのままでいれば、理不尽な苦勞をすることもなかっただろうに」

ステイル「マグヌスは一際大きく銜えたタバコの煙を吸い込み、ため息の様に吐ききる。

「率直に言うよ。君の存在が魔術側にバレた」

え？ と声を上げたのはアウレオルスではなく上条当麻だった。

「なんで！？ 土御門がどうにかしてくれたんじゃないのか！？」

「土御門だって万能じゃないんだ。確かに彼は情報を工作するのがうまい。だが、べつのルートから情報が洩れた場合、彼も対処が追

「いつかないだろう」

「別のルート？」

「誰がやったのかは分からない。が、アウレオルス・イザードと言う魔術師が生きていたと言う情報は魔術師達に知れ渡っていくだろう。もしかしたら、君に恨みを抱くものが明日にでも学園都市に乗り込んで来る可能性だって考えられる。特に君はあの子の為にローマ正教を裏切ってる。生きていると分かっただけなら、裏切り者として始末しにきてても可笑しな話しじゃない」

かつてアウレオルスは、ローマ正教十三騎士団を殺めている。

それだけではなく、グレゴリオ聖歌隊の魔術を跳ね返し、大打撃を与えた。

ローマ正教は『異教徒』であれば何ら処刑も躊躇わない。

「言葉もでないのかい？」

不自然に黙り込むアウレオルスにステイルは訊ねる。

「……正直実感が無いのだが、私のしたことは、それほどの事だったのだな」

「まあ、今の君に問いただした所で何の解決にもならないんだけどね」

「アウレオルス」

上条当麻が呟く。

「前にも言ったけど、お前はインデックスを守るために世界を敵に回したんだ。それは事実であって変えることはできない。でも、そんな事をしてまでインデックスを助けたいと願った事も事実だ。それは誇ってもいいことだと思う」

「……」

「それに、お前は約束してくれただろ。もう他人を傷つける事にその力は使わないって、誰かを助けるためにその力を使っつて。だから、俺はお前の味方だ」

「……本当にめでたい奴だよ君は」

「お前はどうなんだステイル」

「僕は、正直に言つて彼を助ける義務はないんだけどね。ただ、一応一度はあの子のパートナーとしてイギリス清教内にいたこともあった訳で、僕にも多少なりにも彼の顔を変えて野に放つたと言う責任があるんでね」

ステイルの言葉はそこまでだった。

タバコを吸い終わったステイルは箱から新たなタバコを取り出して火をつける。

「だそうだ、アウレオルス」

ステイルの中途半端な会話で上条当麻はある程度の事情を把握できた。

恐らく、イギリス清教全体としてはアウレオルスの事に関して関与することはできないと言う事。

ただ、大っぴらに宣言することは出来ないが、ステイル「マグヌスも自分にもある程度の責任を感じていると言っている。」

「もうすぐしたら、土御門とも合流する予定だ」

そう言う事だった。

実感のわかないアウレオルスだったが、素直に受け取るべきだと思つた。

「すまない」

「クツ、君に礼を言われると上条当麻に言われた時と同じくらい寒気がするから止めてくれないか」

「……なんで俺に言われると寒気がするんだよ」

「分からないかい？ 馴れ合いたくないって事だよ」

「俺は今さつきお前は実はものすごくいい奴だったんだって見直した所だったんだぞ。その気持ちを返せ！」

内心、アウレオルスはこの二人の仲がよいのか悪いのか分からなかった。

が、互いに認め合っている感じにも見えなくはなかった。

「まあ正直そんな事はどうでもいい。とにかく、君たちは一足先に行つてくれ。土御門とはこの先の公園で集まる約束をしているから

ね

と、ステイルはそういいながら歩道に置かれた椅子の一つに腰掛けた。

「お前も行くんじゃないのかよ」

「タバコはね、休憩しながら吸うのが一番なんだ。ここに来るまで一度たりとも休憩を挟まなかったんだ。少しくらい腰を下ろしておいいだろう」

新しいタバコを取り出したステイルは、火をつけて本当に食事が終わった後の様にタバコを吸い始めた。

「土御門と合流してから吸えばいいんじゃないのか？」

上条当麻の問いかけにも応じず、ステイルはただ黙々とタバコをふかす。

「分かった。そこまで吸いたいなら先に行く。ったく、いつも歩きながら吸ってるくせに」

アウレオルスは一瞬どちらか迷ったが、ステイルが手で払う仕草をしたので、上条当麻と共にその場をさっていく。

フウ、と一つ大きなため息をつく。

馴れ合うつもりなんてなかった。

助ける義理もなかった。

自分がどうしてこんな行動を起こしたのか、正直自問自答したいくらいだった。

「……出てきたらどうだい」

上条当麻とアウレオルスの姿が見えなくなったのを確認すると共に、ステイルは呟いた。

コツ、コツ、と路地裏から聞こえてくる一つの足音。

ステイルのまさに目の前の出口へと向かって近づいてくる。

闇の世界から光の当たる表へと出てきたその影は、

背は低かった。

真っ赤な肩までの髪に、その服装は独特で浴衣なのか、ドレスなのか分からない服を着ている。

手先は五センチ以上余った状態で、指先は見えない。

前と後ろで長さの違うスカートを靡かせてブーツを履いたその少女はツンツンと尖ったような声で言う。

「態々一人にならなくてもよかつたのに。二度手間になっちゃうでしょ？」

背はステイルの胸元くらいまでもないだろう。

こうして、座っていても僅かに顔を上げる程度しか身長しかない。

「目的を聞くまでもないだろうね」

立ち上がったステイルは、静かに告げる。

「お好みはなんだい？ レアかミディアムか、それともウエルダンを希望かい？ しかしそうなると加減が効かなくなつて跡形もなくなるかもしれないけどね」

それは、遠まわしに焼き殺すと言っている。

にも、拘らず少女は顔色一つ変えず、むしろ呆れたような表情で、「それって一方的つて事でしょ？ ほんとイヤになっちゃう」

腰に左手を当てて吐き捨てるように言う。

「泣き言は燃えてから言ってくれないか」

ステイルがタバコを弾くとそれが炎へと変わる。

渦を巻き、撰氏三〇〇〇度にも及ぶ炎が生き物の様になつて、ステイルの手の上で踊っている。

「自分が強者だつて思つてる台詞。それほど軽くて儂い言葉は無いわよね？」

少女は不意に歩き出す。

ステイルの炎など気にも留めず、背を向けるような形で上条当麻とアウレオルスが行つた方向とは反対の方向へと数歩進んで、

「一つ忠告してあげちゃう」

少女はゆっくり振り返ると、裾に隠れてしまった右手をステイルへと向けて何かを唱えるように言う。

「振り向かない方がいいよ。そこには貴方を狙う私の人形達がいるから」

ぐわ、とステイルはそちらに目を向けた。
三匹。

得体の知れない何かが蠢いていた。
銀色のネバネバとしたそれは、地に這いながらステイルを狙っている。

人の形をした人形。
完全ではなく、形を固める前に投げ出されてしまったようなそれは、

轟！ と、

次の瞬間には炎に包まれて完全に形をなくした。

ステイルの振りかざした炎が三匹をまとめて飲み込んだ。

「この程度の人形で僕がやられるとでも思ったのかい？」
まさにこの程度だった。

人形達は成す術もなく消え去っていく。

「まさかこれで終わりとも言うんじゃにだらうね？ 魔法名すら名乗る必要がないね」

しかし、攻撃が簡単に破られて、それでも、少女の表情は変わらない。

それどころか、その口元は笑みを浮かべている。

もちろんまだ何かあるだろう、とステイルはルーンのカードを取り出して、

突如、口の中に鉄の味が充満した。

「が……ごはッ……な、なにが」

吐血する。

何が起きたのか分からない。

攻撃を受けたのか。

仮にそうだとしても、彼女は人形に支持をだしていらい一步のその場を動いていないのだ。

それどころか、言葉も発する事もなく、指一本動かしていない。

「クソッ……」

内側からの締め付け。

或いは破壊。

外ではなく、内側で異変は起きている。

「忠告してあげたのに、貴方馬鹿？　って訊ねちゃうよ？」

ようやく少女は動き出し、ステイルに近づく。

「まずは一人つと。齒ごたえなくて残念だったけど」

少女はステイルの懐に飛び込む。

大して速度は速くない。

しかし、今のステイルはそれすら避ける事が出来ない状態だった。

ドガ、と腹部に手の外側で打撃を与える。

それだけで、ステイルは地面に崩れた。

「さあて、これをいぶり出しにつかっちゃお」

少女が右手を振るうと、先ほどの人形達がステイルを囲む。

「命はもうしばらくお預け。一緒に殺してあげなきゃ不公平だもん

ね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1712q/>

とあるもしもの黄金練成

2011年12月19日23時46分発行